

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 29 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370253

研究課題名(和文) 明治・大正期文学の中産階級読者から見た「女の謎」表象に関する総合的研究

研究課題名(英文) A Study of Mystery of Woman as Viewed by Middle Class Readers Meiji and Taisyo

研究代表者

石原 千秋 (Ishikihara, Chiaki)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：00159758

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：近代文学の主人公には「ある領域から別のある領域へ移動する物語的主人公」と「何かについて考える小説的主人公」の二つのタイプがある。しかし、近代日本において生物学的に「発見」された女性は、当時の教育と礼法に則って、余計なことは話さず、余計な動きはせず、感情も表情に表さなかったため、男性知識人にとって「謎」の存在だった。自分の実存感覚を持たない漱石の「主人公」は、自分を愛する女性に唯一の存在証明を求めるが、彼らにとって女は「謎」だったから、彼らは愛を求めて苦悩するしかなかった。これが「漱石的主人公」である。「漱石的主人公」が近代知識人の原型に見えるのは、以上の理由による。

研究成果の概要(英文)：The protagonist in Modern Japanese Literature can be divided into two categories; the story-type protagonist who transitions from one state to another, and the novel-type protagonist who ruminates on certain matters. In Meiji Japan, male intellectuals had only recently come to discover women as a biologically similar but separate variety of human being. They regarded females as a sort of mystical entity due to the fact that, according to the manners and education of the time, women neither spoke, acted, nor expressed any emotion beyond what was required of them. Lacking an actual sense of their own existence, Soseki's protagonists seek the sole affirmation of their being from the woman who loves them. However, as women are to them essentially a mystery, they suffer only anguish in their quest for love. This is the typical hero of Soseki's fiction and it is for this reason that his protagonists emerge as the original model for the modern intellectual.

研究分野：日本近代文学

キーワード：夏目漱石 女の謎 進化論 主人公

1. 研究開始当初の背景

(1) 大づかみな言い方になるが、これまで女性学は女性が様々な面で社会的に差別されてきたことを明らかにし、フェミニズム批評は社会が女性を「他者」としてしか捉えず、その結果として女性を抑圧してきたことを明らかにした。近代文学研究においては、特に後者の立場からのアプローチが多かった。しかし、女性が「他者」であることがどういうことなのかは、具体的にはあまり言及されてこなかったように思われる。科学研究費補助金の課題「明治・大正期中産階級読者から見た漱石文学の「新しさ」に関する構造的研究」において、漱石文学と明治30年代文学や同時代文学を比較研究するうちに、「他者」としての女性とは、漱石文学においては「女の謎」として表象されていることに気づいた。ただしこの研究課題の目的は、漱石文学をポスト=家庭小説であり同時にポスト=女学生小説と位置づけ、主に明治30年代文学と比較した「新しさ」を明らかにすることにあつたので、「女の謎」を社会状況まで含めて解明するところまでは至らなかった。

(2) 明治・大正期に「女の謎」を社会と関わる問題にまで浮上させたのは、進化論である。進化論が「両性問題」という「問題」として、世界には男性と女性がいるという当たり前のことを生物学的に浮かび上がらせた。しかし、こうして新しく「発見」された女性の位置づけは不安定だった。たとえば『男女之研究』(明治37年)には、男女ともに「同じ人類として取り扱はれざるべからず」という驚くべき一節がある。この記述の背後には、「男女ともに同じ人類」だとは思っていなかった多くの読者が想定できる。大正期の『婦人問題』(大正5年)でも、「婦人」の社会的地位は「進化論的見地」か

ら考えるべきだとある。また『婦人の側面』(明治34年)には、「女は到底一箇のミステリーなり」という記述があり、『きむすめ論』(大正2年)には「知り得たるが如くにして不可解なる者は処女の心理作用である」という記述がある。こうした言説は当時としてごくふつうに行われていた。

この時代、女性は「個人としての他者」である以前に、まず「生物学的他者」であり「社会的他者」だったのである。しかも、明治・大正期中産階級の男性は素人女性(品のない言い方だが)と付き合う技術をまだ十分に持っていなかった。田山花袋『蒲団』(明治40年)に書かれるように、中産階級の男性は女性の「表情」が読めないという悩みを抱えることになる。それが、女性を「謎」の存在としてしまったのである。(3) この時代の女性の礼儀作法書では、とにかく「余計な動きはするな、余計なことは言うな」と繰り返し説かれていたから、男性にとっての女性はますます解釈できない「謎」にならざるを得なかった。これは近世以来の儒教道徳とも深い関わりがあるだろう。朝日新聞社の専属作家となった漱石は、山の手の中産階級男性に向けて小説を書き続ける義務を忠実に果たしたから、「女の謎」を書くことが中心的なテーマの一つとなったのである。それは漱石文学に限ったことではなく、たとえば西洋の世紀末芸術の影響を受けた「宿命の女」の表象は「女の謎」のバリエーションである。こうした経緯を踏まえて、本研究では、近代社会が抱える様々な問題系を「女の謎」というテーマから解き明かし、同時にそれを表象した明治・大正期の文学の特質をも明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

(1) ヴェルナー・ゾンバルトに、恋愛

に伴う贅沢が資本主義を発展させたとする一種の奇書があるが、本研究の最終的な目的は、広く社会現象にまで目を配って「女の謎が近代社会をつくった」、そして近代文学はそれをいち早く表象したという趣旨の一種の奇書を書くことにある。もちろん、「女の謎」という実体があるわけではない。父権制資本主義のもとでは、男性は女性を「謎」の存在としてしか見ることができないし、女性は「謎」の存在であるかのようにしか振る舞えないようなからくりを明らかにしたい。関係は相互的だから「近代社会が女の謎をつくり、女の謎が近代社会をつくった」と言うべきで、女性を「謎」と見る男性側の研究も不可欠である。この相互性に注目し、近代が抱える様々な問題系を「女の謎」というテーマから解き明かすことで、明治・大正期の文学が社会で持つ意味を明らかにしたいのである。

(2) 以上のような問題系を最終的な目標として視野に入れながら、本研究の範囲においては基本的に言説研究に限定し、第一に、進化論が「女の謎」に関する言説に変容するまでのプロセスを明らかにし、第二に、明治・大正期の文学を、すでに分析が終わっている漱石文学と比較することで(比較なくしては特質を明らかにすることはできないから)、明治・大正期の文学が「女の謎」を書くことによって、当時の中間階級読者を満足させる方法を獲得したことの意味を明らかにするところにある。当時の中産階級は現代の中間層の原型をなしているから、これは現代においてもまだ女性が「他者」として位置づけられてしまう社会構造を明らかにする端緒となる研究でもある。最終目標に到達するには、物質的基礎だけでなく、政治・経済・教育など様々な制度面からの研究が求められる。その全体像の解明は無理にしても、文学が社会から完全に自立して成立し得

ない以上、それらが言説として現れる限りにおいて、本研究でも取り上げる。たとえば、女性を社会的に差別する言説を分析するためには、明治民法に規定されている女性の無能力規定の背景にある思想の解明は不可欠である。

(3) 女性蔑視や女性嫌悪がすぐさま「女の謎」として現れるわけではない。また、「他者としての女性」がすぐさま「女の謎」として表象されるわけでもない。女性蔑視や女性蔑視や「他者としての女性」という捉え方が「女の謎」として表象されるためには、前項(2)で述べたように、「両性問題」に象徴される進化論的パラダイムという強烈な力学が働いていたと考えている。当時、進化論は「学問」の頂点に位置しており、社会構造や人々の思考にまで影響を与えていたからである。本研究では、進化論によって生み出された女性蔑視や女性蔑視が「女の謎」として具体的に表象されるまでのプロセスを明らかにする。

(4) これまで近代文学研究に導入されたフェミニズム批評は、父権制資本主義体制のもとで書かれた文学が、女性蔑視や女性嫌悪を内包しており、女性を「他者」として捉えてきたと指摘した。しかしそれが文学においてどのように表象されているか、その具体的な点までは十分に論じてられてこなかった。本研究においては、フェミニズム批評の大きな成果を取り入れながら、女性蔑視や女性嫌悪や「他者」としての女性像が、明治・大正期の文学においては「女の謎」として表象されていることを明らかにする。

明治・大正期の中産階級読者は女性蔑視や女性嫌悪の感情を持ちながらも、女性への関心をも持ち続けた。こうした読者を引きつけるには「女性の謎」を書くことが最も有効な方法だったに違いない。その中心

が漱石文学である。エリート養成を目的とした旧制高校において漱石が特に好まれて読まれたことは、漱石文学の「倫理」性だけではなく、「女の謎」に振り回される悩みのレッスンを紙の上で行っていたからだと考えられる。本研究は、現代の中間層の原型となった中産階級読者のリテラシーや心性を当時の雑書や雑誌から測定し、「女の謎」が漱石文学特有のものとしてだけあるのではなく、明治・大正期文学の特質でもあり、言説や制度の上で当時の社会と接続していたことを明らかにする。

3. 研究の方法

漱石文学における「女の謎」についてほぼ分析が終わっており、活字として発表もしてきた。本研究においてはその成果を踏まえて、明治・大正期の文学に広げていく。具体的には、明治・大正期の文学が中間層の読者に向けて「女の謎」をどのよに表象したのか分析することが中心的課題なので、「女の謎」にかかわるとされる明治・大正期の文学をピックアップしたうえで、それらのパターンに関連する同時代の啓蒙的な雑誌記事や雑書を収集して分析し、明治・大正期の文学とこれらの同時代言説がどのようにかかわっているかを考察するが、この明治・大正期の都市中間層に向けて小説を書き続けた漱石文学に関する考察が中心となる。その結果、小説の主人公には二類型があり、その一つが「女の謎」と歴史的な必然性をもって結びついていることが明らかになった。これは文学理論上も大きな意味を持つと考える。

4. 研究成果

近代文学の主人公には二つのタイプがある。一つは「ある領域から別のある領域へ移動する人物」で、これを「物語的主人公」と呼んでおきたい。NHKの「連続テレビ小説」の主人公はまさに「少女から女へと移

動する人物」だ。この場合の「移動」とは、「成長」のことである。もう一つは「何かについて考える人物」である。これを「小説的主人公」と呼んでおきたい。この「小説的主人公」がいわゆる純文学を支えてきたと言ってもいい。漱石も「自分と女性について考える人物」を繰り返し書いた。そこで、「小説的主人公」が漱石文学的な性格を持つにいたった歴史的な経緯をできるだけコンパクトに書いておこう。

話は進化論からはじまる。

明治の初期、日本に進化論が大変な勢いで入って来ると面白いことが起きた。生物に雄・雌があるならば人間にも男・女があるではないか。日本の男性知識人はそう気づいたのだ。それまで男性知識人は、極端に言えば、女性を自分と同じ人間だとは思ってなかったから、これは「両性問題」という大問題となった。

たとえば、大鳥居弁三・澤田順次郎『男女之研究』（光風館書店、明治三七・六）では「男子と女子とは、本来、絶対に相異なるものにあらず、等しくこれ人類なり」という一節がある。ごく当たり前のことを書いているのだが、こういうことを強調しなければならないのは、当時まだ女性を男性と同じ「人類」だとは思っていない読者を想定したからだろう。近代文学は資本主義の申し子だから、常にフロンティア、すなわち未知の領域を必要とする。「両性問題」の発見によって、近代文学は女性という名のフロンティアを手にしたのである。ただし、この時点での「女性」とは、より多く「女性の体」のことだった。

女性という名のフロンティアは、明治三〇年代になると二つの文学ジャンルを生み出した。

一つは家庭小説である。一家の主が家族と一家団欒の時間を過ごすこと自体が新しい体験だった。「スイートホーム」はこの

時期の流行語となったのである。もう一つは女学生小説である。男性知識人は、高等女学校に通う教育を受けた女性が身近にいる日常をはじめて経験した。そうした女性と交際したい気持ちは強かったが、その方法もわからず、女性は「謎」の存在だったし、女学生小説を読む読者の関心は、彼女たちがいかに「墮落」(つまりは妊娠である)するかにあった。「女性の体」への関心である。

しかし、明治三〇年代頃から『婦人の心理』というような、女性の心に関する本が数多く刊行されるようになった。正岡藝陽『婦人の側面』(新声社、明治三四・四)には、「女は到底一箇のミステリーなり、其何れの方面より見るも女は矛盾の動物なり」という一節がある。男性知識人は、女性は統一的な自我を持つ存在とは認識していなかったのだ。

漱石文学をよく読んでいる読者ならば、「矛盾」という言葉に思い当たるはずだ。『三四郎』の主人公である小川三四郎が、上京して同郷の先輩・野々宮宗八を東京帝国大学の研究室に訪ねたあと、池の端にしゃがんでいる場面である。里見美禰子が三四郎の前を不思議な動作をしながら通り過ぎると、三四郎は一言「矛盾だ」とつぶやく、あの場面だ。三四郎は「この女性の仕草の意味することがわからない」と言っているのがある。三四郎が口にした「矛盾だ」という言葉は、当時の男性知識人に共通する女性の見方だった。

文学がこの「謎」を見逃すはずはない。こうして、「女性の謎」が近代文文学の新たなフロンティアとなった。これは「女性の体」の問題ではなく、「女性の心」の問題である。

漱石が入社した時期の朝日新聞社は、マーケットを下町の商人層から、現在の中間層の原型となった、山の手の新興エリート

層にシフトチェンジしようとしていた。この山の手の読者にふさわしい小説家として、夏目漱石を専属作家として迎えたのである。漱石が山の手の読者に向けて山の手を舞台とした小説を書き続けた理由はここにあった。

明治四〇年頃の東京は、あまり適切な言い方ではないかもしれないが、「高級な文化」が花開く時期だった。それは、ある一定のエリアに四つの条件が揃ったからである。第一は資本が集中すること。第二は知識人が集まること。第三は知識人の生み出した文化を享受できる教育を受けた中間層が生まれること。第四はあり余る時間。そこで、この時代に近代文学が一気に開花した。夏目漱石のデビューはこの時期だから、とても幸運だったと言っていい。

漱石文学のヒロインの多くは、明治三〇年代に、おそらくはミッション系の高等女学校を卒業しているようだ。漱石が明治三〇年代に大流行した家庭小説と女学生小説を意識しながら、それらを超えたポスト＝家庭小説、ポスト＝女学生小説を書くことができたのは、以上のような条件が整っていたからである。これらは明治民法を強く意識しているから、明治民法小説＝家族小説と呼んでおきたい。

漱石は山の手の文学を「女性の謎」、すなわち「心」の問題としてテーマ化した。漱石文学の男性知識人たちは、当時として最高の教育を受けたがために、「自己とは何か」という答えのない問いに悩まされ続けた。この不安定な自我に安定した存在理由を与えてくれるのは「他ならぬこの私だけを愛する女性の存在」だが、男性知識人は「女性の謎」に悩み続けるしかなかった。

『こころ』と同時代に刊行された白雨楼主人『きむすめ論』(神田書房、大正二・一)には、次のような一節がある。ここ

で言う「処女」とは「未婚の女性」というほどの意味である。「知り得たるが如くにして不可解なる者は処女の心理作用である、言はんと欲する能く言はざるものは処女の言語である、問へども晰かに語らざる者は処女の態度である、知って而して知らずと謂ふものは処女である、想ふて而して語らざるものは処女の特性である、不言の中に多種多様の意味を語るものは処女の長所である」と。これでは女性は「謎の存在」になるしかないだろう。

漱石は「女性の謎」を書き続けた作家である。たとえば、『こころ』。「先生」が、あれほど静との結婚に逡巡するのは、叔父に裏切られて人間不信に陥ったからという理由からだけではない。女性という存在それ自体が、決して解くことができない「謎」だったからだ。だから、「先生」の自我は不安定だった。それが、「先生」が言う「私だけの経験」の内実だった。「先生」こそは、「自分と女性との関係について考え続ける小説的主人公」の原型だったわけだ。

言うまでもなく、「女性の謎」とは「心」の問題である。しかも、『こころ』の「先生」は思想は固有の経験から生まれるものだと言う。ここには「人は誰でも一生に一篇は小説を書くことができる」という近代的な小説観の起源がある。すなわち、『こころ』によって、近代文学は「個人に固有の経験と内面」という無限のフロンティアを手にしたことになる。したがって、個人主義が尊重され、こうした小説観が生きている限り、『こころ』をはじめとする漱石文学は近代文学の頂点に君臨し続けるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

石原千秋「二人で一人、漱石文学と主人公—主人公論序説」(単著)『三田文学』

2017年5月、p193～p208。

石原千秋「主人公の二類型、あるいは必然と偶然」(単著、審査あり)『文学・語学』全国大学国語国文学会夏季・第218号、2017年3月、p114～p123。

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

石原千秋『漱石と日本の近代』(単著)上下2冊、新潮選書、2017年5月、計486ページ。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石原千秋 (ISHIHARA Chiaki)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：

00159758

(2) 研究分担者

該当なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

該当なし ()

研究者番号：

(4) 研究協力者

該当なし ()